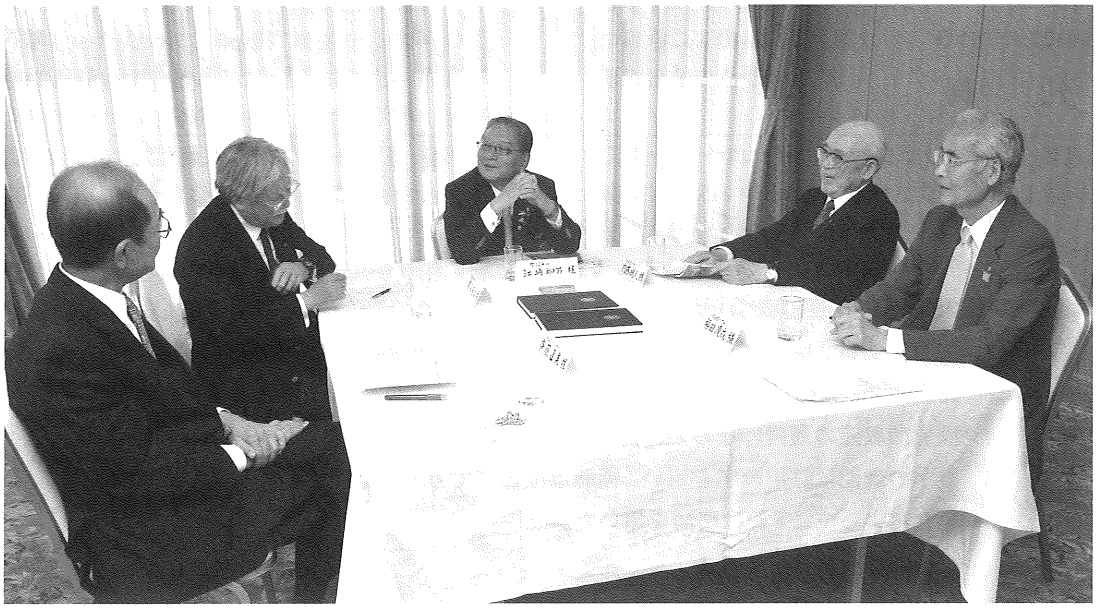
座談会「10年の進化の軌跡をたどる」



出席者

内藤　明人　パストガバナー（1998～'99年度）
福田　清成　パストガバナー（2000～'01年度）
豊島　徳三　パストガバナー（2003～'04年度）
斎藤　直美　パストガバナー（2006～'07年度）
【司会】江崎　柳節 ガバナー（2007～'08年度）

紙上参加

野村　重彦　パストガバナー（1999～'00年度）
岡部　快圓　パストガバナー（2002～'03年度）
大島　宏彦　パストガバナー（2004～'05年度）
髙橋　治朗　パストガバナー（2005～'06年度）

2008年6月7日 名鉄グランドホテルで開催

過去10年間の各ガバナーが掲げた理念を振り返る

江崎――本日はお忙しいところ大変ありがとうございます。この座談会では、当地区の過去10年間のいろいろな進化や思い出、問題点などについて忌憚なくお話しいただき、同時に今後の指針をいただければと思います。また、本日欠席のパストガバナーには紙上で参加していただきます。では、内藤パストガバナーからよろしくお願いいたします。

内藤――私がガバナーを務めさせていただいたのは、名鉄観光の犬飼さんがガバナーをされた後になります。犬飼パストガバナーは、「愛知県はＲＣが日本でも一番多くある地区なので、効率良くクラブ活動を行おう」と考えられ、「地区リーダーシッププラン」を発案されました。それを実施したのが私の年度でございました。初めてのことで心配でしたが、地区幹事やガバナー補佐が非常に優秀な方ばかりで、無事1年を過ごすことができました。それから、ちょうど私の年度に、万国博覧会が愛知県で行われることが決定いたしまして、「ロータリー館をつくろう」という皆様からのご意見で、国際博委員会の委員長を仰せつかりました。私は昔か

ら非常に良い方に恵まれるという運がありまして、万博のロータリー館開設でもそういう皆様のお助けで順調に進めさせていただくことができました。また、資金についても多少余裕を持って終わることができ、余ったお金は公共的なことに使わせていただきました。ロータリーの精神に沿った結果を得ることができまして、これも私としては非常にありがたいと思っております。

江崎――私が鮮明に覚えているのは、内藤パストガバナーは、それまでずっとおざなりなやり方で行ってきた世界社会奉仕をやめようとおっしゃいましたね。あのときの思いをお聞かせください。

内藤――当時の世界社会奉仕とは、年間1,000万円近くの予算を使い、ガバナーおよび地区の幹部が奥様を連れて7、8人でフィリピンを訪問するということが常識になっていました。しかし、これが本当にフィリピンの難民のための奉仕となるのかと、私は疑問を抱いたのです。それでフィリピンの有力な方に伺うと、「彼らは乾杯してゴルフをして非常に満足して帰られるけれど、あのお金は実際には難民に渡らずに、フィリピンの幹部が山分けしている」と言うんですね。そういうことを実際に聞いたので、私の年度はやめることにしました。フィリピンの幹部

内藤明人パストガバナー

の方からは、ひどく反発がありましたが、それも断り、その後にお金をどう利用しようかと考えていたところ、香港のロータリーの方が、揚子江がカーブするところの近くで水害があり、ある村が困っていると教えてくださいましたので、その村の小学校の再建のために寄付しました。

江崎――それがきっかけとなったんでしょうね、私のクラブでも地区に委託するということをやめまして、クラブ対クラブで奉仕を行うようにしました。それでは次の野村パストガバナーお願いいたします。

野村――私の年度では、当時のＲＩ会長、ラビッツァ氏が“ロータリー2000”と位置付け、「新世紀の信じられないほど増え続けるニーズに自信を持って立ち向かい、対応できるよう柔軟性に富む組織へと革新的に変化すべき」だと提言しました。そこで私は、新しい世紀、ロータリーの奉仕活動の礎を再構築すべく、会員の皆様にさまざまな提言をし、またお願いをいたしました。多くの奉仕活動の中で印象に残っているものは、当時、長引く不況の中で進行していた会員減少に対し、歯止めをかけるべく立ち上がった豊田東ＲＣ、安城ＲＣの皆様の努力が実を結び、新たに豊田中ＲＣと三河安城ＲＣの2クラブが誕生したことです。その結果、会員の純増を果たすことができました。また、当時全国で38％の実施率であった、犬飼パストガバナー年度にスタートしたＤＬＰ（地区リーダーシッププラン）が3年目を迎え、その定着に努力しました。全国会議としての“ロータリー青少年交換愛知会議”の成功が印象深く心に残っております。

江崎――ありがとうございました、次は福田パストガバナーにお話を伺います。

福田――2000～'01年度というのは、20世紀が終わり21世紀に入るということで、同僚のガバナーエレクトも非常にそのことを意識していました。ＲＩ会長のデブリン氏もとても意識していたと思います。そこで、デブリン氏はインターネットとパワーポイントを徹底的に活用しようとおっしゃいました。私もこの機会にパソコンを使うようになり、各クラブにも会報は自分たちで作るように伝えました。パソコンで作れば経費を100万円ぐらい節約できるの

福田清成パストガバナー

ではないかということで、すぐに実行してくれたクラブもありました。今ではほとんどのクラブがその方法でやっていますが、これはデブリン氏の功績であると思っています。また、新しい世紀に入るということで、私の年度にいくつかの新しい試みがありました。まずロータリー財団では、地区補助金という制度をテスト的にこの年に始めました。それから、世界平和フェローシップも、デブリン氏の年度に試行的に始められたものです。現在、両方とも本格的なプログラムに入っており、各地区を活性化するうえで非常に役に立っていると思っております。それからWCSについてですが、私の年度から、フィリピンとははっきりと切れたという風に言えますね。WCSというのは、地区はあまり仕事をしてはいけないと思います。むしろクラブが中心になってやるべきですね。それからGSEに関して、スウェーデンの北部地区が日本の地区と交流したいということで、当時の野村ガバナーが私にすぐ連絡をくださり、私は会計長の沼田さんに頼んで英語ですぐ相手に返事をしてもらいました。一番早かったということでスウェーデン北部と当地区とで交換するということになりました。こうした経緯もあり、この地区のGSEが非常に活発化していくきっかけになったと思います。それからもう1つ、私の年度には、和合RCが地区大会を運営したのですが、和合RCというのは非常に面白いクラブでして、活発でいろいろな新しいことに取り組むという性格を持っています。そこで手作りの地区大会ということを発案・運営していただきました。以来この地区では、手作りの地区大会をやろうという気運ができてきたのではないかと思います。

江崎――ありがとうございます。福田年度は、経費削減をかなり実行していただいた印象がありますね。それでは、2002～'03年度の岡部パストガバナーお願いします。

岡部――2002～'03年度は、タイ国初のRI会長、ビチャイ・ラタクル氏が「慈愛の種を蒔きましょう」と、東洋的なテーマを掲げられ、我々にロータリーの原点について優しく語りかけてくださいました。ロータリーは本来、各クラブが主体であるので、“トップダウン”ではなく“ボトムアップ”で活動を行い、新しい強調事項は一切提示しないとのことでした。ただし、ポリオに関しては、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロにより、各国からの援助金がテロ対策に使用されたため、あと一歩のところまで来ていたポリオの撲滅が資金不足になる恐れがありました。ワクチンの投与が停滞すると、ウイルスが各地に拡散してしまい、大変な状況になってしまうため、緊急の寄付の要請があり、当地区では3年間で1人150ドルを寄付することに決めました。その資金の捻出のため、公式訪問は100万ドル例会（カレーライス例会）をお願いしたところ、各クラブとも快く承諾していただき、ロータリーの友情に感謝した次第であります。またGSEは、当地区と長年青少年交換を行っているオーストラリア南部の地区と行いましたが、偶然その地区が山火事に見舞われ、義損金を地区大会に持参したところ、大変喜んでいただき、その結果、大会が大いに盛り上がったことを今でも鮮明に記憶しております。

江崎――それでは、2003～'04年度の豊島パストガバナーお願いします。

豊島――私の年度は極言すれば、万博に始まり万博に終わった年度だという風に理解しています。私は先のお2人のようにお話できません。というのも、私は地区役員も何も経験せず、い

きなりガバナーという役職につき、本来のロータリーを1つも分からない立場でガバナーを務めたものですから、大変皆様にご迷惑をかけたなという思いでございます。私のときのＲＩ会長はジョナサン・マジィアベ氏というナイジェリアの方でございました。おそらく世界で最初であろうという風にいわれておりますが、アナハイムに参りましたときの握手の印象が非常に強く残っています。前年のＲＩ会長のラタクル氏というのは非常に柔らかい方でした。一方、マジィアベ氏には非常に強い握手をしていただきまして、「しっかりやりなさいよ」と励ましをいただいたような、そんな感触でした。そのときに示されたテーマが「Lend a Hand」、“手を貸そう”というものでした。そのテーマが今も引き継がれておりますね。私はとりあえずここで終わらせていただいて、後ほど万博のときにまたお話しさせていただければと思います。

豊島徳三パストガバナー

江崎――そうですね、豊島パストガバナーには後ほどじっくりお話しいただきましょう。続きまして、大島パストガバナーと髙橋パストガバナーです。

大島――豊島パストガバナーの後を継いだ私の年度も万博に集中したと言っていいでしょう。地区方針も「ロータリー館建設と運営を成功させる」をトップに据え、あとは「職業奉仕を原点に」「世界を繋いでいることを忘れない」「ロータリー百年をお祝いに終わらせない」ということだけに集中しました。ガバナー就任前の研修では、世界中から集まった人の誰も愛知万博のことを知りませんでした。大阪の世界大会に来た人が、「大阪」のほかに知っている日本の地名は「豊田」だけという状況の中、ロータリー館の建設が始まったのです。地区の力しか頼れません。「失敗したら地区解散しかない…」という覚悟が、私のガバナーとしてのスタートでした。そうなると、行った方がいいと思う仕事もすべて断念するしかありませんでした。私のモットーは「1度にできることは1つだけ」でしたし、直前直後のガバナーもロータリーでの仕事減らしには努力されました。委員各位にも地区の方針にご理解をいただき、そのおかげで地区行事や事務、刊行物などを大幅にカットすることができました。私の年度のガバナー訪問は合同で行うということを原則にし、ＩＭもやめて7クラブ合同例会を開催した分区もありました。さまざまな仕事を地区役員に分担してもらいましたが、中でも安藤地区幹事には万博を含めてあらゆる行事をカバーしてもらい、おかげでガバナーの勤めは手続要覧にも手を触れずに任期を終えることができました。

髙橋――私の年度は、前年度の終わりに名古屋葵RCが誕生し、現在の81RCとしてのスタートの年度でありました。また、ＲＩ会長のC. W. ステンハマー氏のテーマは「超我の奉仕」ということでした。そうして始まった私の年度のハイライトも、やはり万博会場内に建設したロータリー館です。大島パストガバナーから引き継いだ事業でしたが、7月のガバナー就任時は、まさに「愛・地球博」が盛り上がってきたころでした。そのような中、当地区会員の献身的な奉仕によって、2万名を超えるロータリアンとその家族の方々にロータリー館を利用していただきました。内藤パストガバナーが2005国際博委員会の委員長をお務めになったことや、館長の豊島パストガバナー、福田パストガバナー、盛田パストガバナーをはじめ多くの方々のサポートとご理解が得られて大成功を収めることができました。これは2760地区だけでなく、日本のロータリークラブの歴史に残る素晴らしい快挙であったと確信しております。この事業にご協力いただいた方々は、まさに「超我の奉仕」を実践したものであり、ロータリーの精神

を一般の方々にも見える形で発信できたものと思っております。

江崎――ありがとうございました。それでは斎藤年度に参ります。よろしくお願いいたします。

斎藤――私の真のロータリー歴は福田パストガバナーの年度から始まりました。実際のロータリー歴は27、8年ですが、福田パストガバナーの時から遡るとわずか7年です。というのも、福田ガバナー年度のＩＭで、福田パストガバナーのご挨拶と分区代理の方のご挨拶との間に非常に落差を感じたのです。一方は、ロータリーの心からのスピーチでしたが、一方は全然見当違いなものだと思いました。今思いますと、そのときにショックを受けて目覚めたのですね。そこから本当に受験勉強もどきの勉強を一生懸命いたしまして、さまざまな方の文献や、地区大会、地区協議会の文献を読みあさりました。そして自分がガバナーになったとき

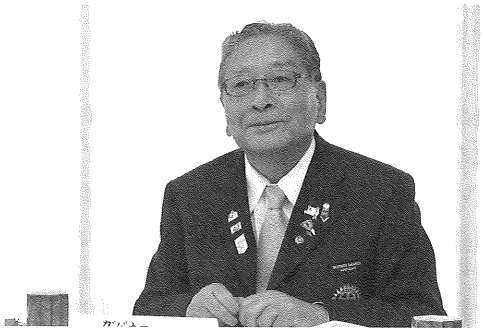
斎藤直美パストガバナー

に、万博という巨大なプログラムがあったため、これでロータリーがすべてだと言われたら、どうも格好悪いなという思いがありました。それで「元に戻そうよ」という3つのテーマを挙げさせていただきました。とりわけ「クラブ奉仕に徹しましょう」と。これは、言うは易く行うは難し、ですね。それから、「ロータリーを学びましょう」。実は今、非常に感激しているのですが、内藤パストガバナーの時代、それから福田パストガバナーの時代に、ＷＣＳ、ＧＳＥがそういう経過をたどって今日あるんだということを聞かさせていただいて、非常に感激しております。その成果の上に、この地区のＷＣＳ、ＧＳＥが疾走している。その疾走している列車の中に私も乗せていただいて、「ロータリーはこうだ」ということを実感し、感動させていただいた1年だったと思っております。

さて、そういう中で私が考えたのは、ＤＬＰの完成ではなかろうかと思います。優等生的なことばかりを並べて「勉強会をやろうよ」としきりに言っていたような記憶がありますね。それからもう1つは、広報委員会です。当時これが全く機能していないという感じがいたしまして、整備し強化するという大きな作業が必要なのではないだろうかと思いました。戦後世代の僕らは、「こんなことやっているのだから分かって欲しい」というささやかな自己主張みたいなものがある世代でして、「陰徳」にはちょっとした悔しさがあったものですから、広報委員会を重視させていただきました。ですから、私の年度は先輩の皆様が整備していただいた列車に乗りながら、「ここの車輪とここのビスが抜けている」という部分だけを補強していった、そういう1年だったかなというように感じております。

江崎――ありがとうございました。考えてみますと、斎藤パストガバナーや私は専門職業人の出身でございまして、実業界から出るガバナーと専門職業人から出るガバナーでは、やはり考える基盤が多少違いますね。斎藤年度では、今までの中での原点回帰とロータリーの内部検証の中でやっておかなければならないことをやっていただきました。そして、私の年度となる訳ですが、少しだけ申し上げますと、私が一番気になることは、ロータリーが社会にこれだけ良いことをしていてもほとんど理解されてないということなのです。ロータリーは歴史的に見ましてもそうですし、内容としましても、実業界と専門職業界との非常にたくさんある職業分布の中から原則お1人だけに代表として加わっていただいて、厳密な出席のルールを守り、週1回必ず例会に出てきて自分を磨こうという約束された団体であります。他の慈善団体と一緒にされては困りますし、それは許しがたいことだと私は思っております。私の年度では、ぜひその違いを踏まえて、皆が自分の心の中に

もそうした自覚を持ち、ロータリーらしいことを行おうということで、「違いをもたらそう」という地区テーマを挙げさせていただきました。これを1つの行動の規範として、主に力を入れたのは「平和」でございます。ロータリー財団の中にはさまざまなプログラムがあり、奨学生も今では「ロータリー国際親善奨学生」と名称が変わりました。国際奉仕における青少年交換やWCSも、世界平和を目指していますが、


江崎柳節ガバナー

そんな中で極め付けの「ロータリー世界平和フェローシップ」という制度が現在活躍し始めております。そして当地区からも世界平和フェローを排出することができるようになりました。これは、今後ロータリーが行うべき道の1つだろうと思っております。それから、GSEやWCSはこのところ、非常にロータリーらしい活動となっております。先ほど内藤パストガバナーにご心配いただいたようなことはできるだけないように、クラブ対クラブの進め方ができないところは、地区が代表して現地に行って、十分検証したうえで小学校をつくったりしており、良い方向に向かっていると思います。会員数は、残念ながら減っております。これは、単に数の勝負ではないと思いますが、増強ということだけでなく、入った方を維持するためのプログラムに問題があると、私は以前から思っていました。クラブに入った方がその魅力を感じてずっと残っていただくための情報提供が、クラブ奉仕でなされてない。クラブ奉仕委員会でも、各クラブがあまり機能していないということが盛んに訴えられています。入った方を維持する十分な魅力を感じていただけるクラブ奉仕が機能していない。各年齢層に、今日的なロータリーの面白さの意味や情報を提供するということが全くないんですね。その辺りが今後の課題だろうと思っております。

この10年で最大のイベントとなった愛・地球博ロータリー館の思い出

江崎――それでは、世界的に注目されました万博ロータリー館の話題に入りたいと思います。内藤パストガバナーの年度からお話を始めていただきましょうか。

内藤――たまたま私の年度に、愛知県で万博が行われることが最終決定されましたので、その中にロータリー館をつくろうというご意見が出ました。そして、大阪万博のときには、ある館の中にロータリー館があって、独立した館ではなかったので、今回参加するなら、独立したロータリー館をつくろうと、皆様が非常に意気揚々と、「よし、やろう」と言ってくださったものですから、具体的に県へ申し上げたら、県の方も友好的に受けてくれまして、すべて良い雰囲気で進んだわけですね。次に、予算として2億6,000万円をどのように集めるかということになりまして、各クラブに割り当てるという方法でやってみたら、予想以上に順調に進んだわけですが、これは本当に、ロータリー精神に溢れる方々が揃っていたということなのですよ。また運営の館長として、後任となる豊島パストガバナーも、半年の間毎日のように勤めていただいて、日本中、また世界からも、多くの方々にロータリー館へおいでいただきました。これは、自分の持っている力以上に、私の人生は運に恵まれているのではないかなと思うほどの結果でした。私としては、責任者として、皆様のご支援でうまくできたと思っております。これもすべてロータリー精神の奉仕の精神で皆一致団結してやっていただいたおかげだと思っております。

江崎――ロータリーでは、思った以上のことができてしまうということで、この頃盛んに「ロータリーマジック」という言葉を好んで使わせて

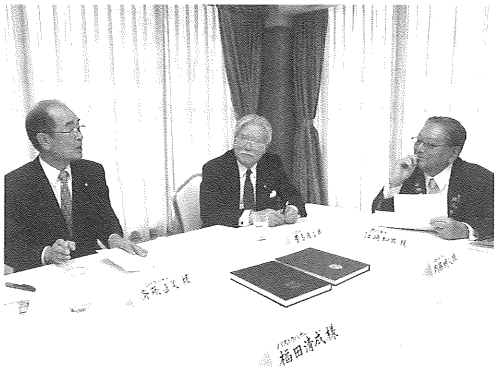
いただいております。では福田パストガバナーお願いします。

福田――資金の話になりますが、私は内藤パストガバナーから資金担当の副委員長を、という話をいただいて、最初に地区から全国の皆様にお願いするということをしました。内藤パストガバナーの資料の中に、大阪万博の話が出ていまして、大阪地区は1人500円、全国は200円出したそうなのです。そこで、今回もそういうやり方がいいのではないかということで、当地区は1人1万円ずつ出せば6,000万円、他の地区から1人4,000円ずつ出していただけば、10万人いるので4億円になる。あわせて4億6,000万くらいでやろうという計画書でした。それを私はガバナー会に行って、お願いしたんですね。ところが、私の直前に、「米山記念館の運営が難しいからみんな100円ずつ出してくれ」と言った人がいたのです。ところが、「そんなバカげた話があるか。ガバナー会で決めて徴収するとは何事だ」という意見で、その話が流れまして。その直後に私が話したものですから、非常にまずかったのです。結局、外部からいただくお金は少なかったのですが、この地区では当初、1カ月に1人2,000円ずつ、5年間集めようということになりました。最初の年は1,000円ずつ集め、残りの1,000円には地区費用の残金を充て、1,800万円を積み立てたのです。ところが、その後の2～3年の間に、いつの間にか1年に1万円ずつ出すという話にすり替わってしまいました。とはいえ、地区で2億円ほど集め、また、外部からも数千万円いただいた形で成り立ちました。それからもう1つ、世界大会の残金もロータリー館に充ててもらおうということで、これも内藤パストガバナーに、「今度の会計長は同期なんだろ？ 頼んでもらうようにしないといかんぞ」と、尻に火をつけられて僕は電話しました。それで、1,500万円ほどいただきました。

江崎――それでは、お待たせしました。豊島館長にいろいろお話していただきたいと思います。

豊島――館長に就任したのは、欠席裁判ではなく出席裁判で、「ロータリーの館長は君だ」ということがパストガバナーの間で決まってしまったのです。それで、私は能天気なものですから、「なんとかなるわさ」と、そういう気持ちでお受けしました。ところが、今お話があったように、その当時は4億6,000万円の予算だったのです。何故4億6,000万円だったのかというと、当初は永久的な建物を建てようという計画だったのです。私はその辺りから参加したのですが、万博のレギュレーションによりますと、必ず更地にしてもとの地主に返しなさいということになっています。ですので、それほどのものをつくる必要がないということで、建物の予算が2億円になりました。そして、運営費が6,000万円くらいだろうということで、2億円6,000万円のお金を集めなければならないということで始まったのですが、確か数千万円の段階で私は引き継ぎました。ところが、現実に大島年度に万博は開催されるわけですから、「さあ、どうしよう」ということになりまして、「私がすべての誇りを受けますから、1万円ずつ集めてください。そうじゃないととても集まりません」ということで、皆様のご了解を得たのです。ですから、その後の公式訪問の際にはガバナー補佐の私に来るコメントが全部「あなたが公式訪問で答えるのですよ」というものでしたね。それは当然です。しかし、おかげさまで、2億6,000万円というお金が集まりました。そんな中で、私は非常にがっかりしたことがあります。ガバナー会に内藤パストガバナーがご説明に行

かれたのです。私がお供をして参りました。そこで、内藤パストガバナーが一所懸命お話をされたのですが、「そうですか」で終わりなのですよ。あれには本当に、内藤パストガバナーも



失望されたと思います。私もがっかりいたしました。これは、もう他の人にあまり積極的な協力を当てにしてはいけないのだなと思い、自分たちでやらなければいけないなということで、東京から砂をかむような思いで帰ってきた記憶がございます。そんなこんなでロータリー館は完成し、ロータリー関係の方が例会を行ったり、メーキャップだったり、家族関係で訪れてくれた方が、2万人くらいだったと記憶しております。そのほか7、8万人、合わせて約10万人があの建物を活用してくださったのではないかと私は思っております。

私は185開催日中、147日、80%ほど公式には向こうに参りました。その他にも個人で行っておりますので、90%くらいは行っていると思います。余談ですけれども、日本のパビリオンの館長を調べましたら、私が一番年上でございました。それから、一番出勤したのも私でした。以来、今でも自分で言っているのは、「世界にロータリアンが100年間に何人もいたかもしれないけれど、私はオンリーワンだ」という風に思っております。そして残ったお金を、1,000万円をロータリー財団に、1,000万円を米山奨学記念財団にということで、7月1日のガバナー会で内藤パストガバナーから寄付していただきました。加えて、実は、ロータリーの100年を何かの形として残したいということで、別に500万円をリザーブしておきまして、さらに、県のご協力を得て、あの石のモニュメントをつくりました。今にして思うと、いろいろなことがございまして、嫌な思いもいたしましたし、つらい思いもいたしましたけども、すべて成功して、モニュメントを見た瞬間に、私はすべてを忘れることができました。

福田――しかし、反対運動もありましたね。そんな中で、環境委員長をしていた国分さんは万博のボランティアにおいても非常に活躍していて、そこで上手に実行できるような方向へ仕向けてくれました。ですから、表には出てないけれども彼の功績がロータリーとしては非常に大きかったのではないかと私は思っております。また、国分さんや内藤パストガバナー、それから盛田さんは、基金を集めるために演奏会を開催してくださいました。そういうことで非常に骨を折っておられたと印象に残っておりますね。それから、もう1人、東尾張分区の坂田パストガバナー補佐には本当に感謝しています。我々の年はブエノスアイレスで世界大会が開催されまして、非常に遠いところですよね。そのときに、東尾張分区の坂田ガバナー補佐が、万博のＰＲのために同行してくれたのです。クラブでパンフレットを刷ってくださって、それを配り、彼は非常に力を入れてくれましてね。また、東尾張分区はＩＭも万博のＩＭをやってくれました。

江崎――当時、ＩＭをやめようという空気の中で、瀬戸北ＲＣの坂田パストガバナー補佐が燃えるがごとき情熱で、東尾張地区はＩＭを実行しまして、ＩＭというよりはむしろ、「万博を東尾張地区の手で成功させよう」という感じでしたね。本当にあのときは皆が立ち上がりました。そして本当に成功裏に終わりまして、2万人のロータリー関係者が万博に訪れましたね。今年のロサンゼルスの世界大会でも1万人ちょっとでしたから、比べても倍近くの人がロータリー館を訪れてくれたことになりますね。

福田――しかし、すごくいい場所でしたね。

内藤――上品な場所でしたね。

豊島――雨が降っているときに、傘を差して、子どもと一緒に立ってお弁当を食べている方がいらっしゃいましてね。それがいかにもお気の毒で、そういう方には「どうぞ、こちらに入って。汚さないでくださいね」と勧めるのですけど、全部呼び込んでしまうとパンクしてしまいます。ロータリーであるからには、してあげたいということは、やれる限りはやりましたが。

江崎――私がお邪魔したときには、九州のロータリアンが親睦旅行を兼ねて団体で来ていました。いろいろな方に利用していただいていましたね。

斎藤――ところで、万博のことでタイミングが良くなかったのは、米山とかポリオとかロータリー財団とかのドネーション強化要望と万博の協力金要請とが重なったことですね。それで、すごく抵抗があったのだと思います。それでも、私がガバナーエレクトのときに第2500地区、網走地区に行ったときにですね、「今度我が地区で万博が開催されます。募金のほどよろしくお願いします」とご挨拶にいったのですね。すると驚くことに、あの地区からはちゃんと送ってくださった。

豊島――そうですね。それから、長崎の地区からもちゃんといただきました。それで、「何故？」と聞いたら、「だってあのときいただきましたから」って。そういうことがあるのですね。かつてのことをお忘れになっていない。それは有り難いなあって思いました。

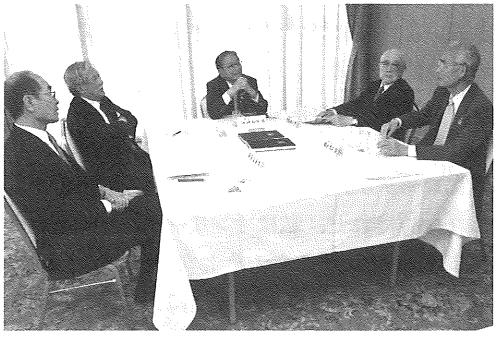
斎藤――私は、彼らの地区大会に出席させていただきましたので、そのときにお礼を申し上げました。

豊島――やっぱりロータリーというものは、万博だけではなく、人としての繋がりを持たなければ絶対にだめなのだと私は思いました。やっぱり最後は人と人とが顔を見合わせていないといけない。ＷＣＳも私はそうだと思います。ロータリーというのは、人と人とが直接接し、語り合うことだと思いますね。

さらなる進化を目指し今後やるべきこと

江崎――本当にその通りですね。さて、いいお話をいただいたところで、ここからはこの10年間の問題点について、お話しいただけることがあればお願いいたします。

内藤――会員が徐々にですが相当減ってきていますね。こういう歴史あるロータリークラブの会員が、どうして減っているのか。中身の良い会員ばかりになってきて、数だけの問題ではないという説も考えられますが、しかしやはり、会員が減るということは、我々責任者を務めた者にとっては、責任のあることだと思います。ですから、これにどう歯止めをかけるか。さらにもっと再生して、この座談会も次への発展を考えた座談会ですから、こういうことを率直に受け止め、考えなければいけないと思います。世の中というのは、今、平和で非常に良いときですから、平和なときにこそ、ロータリー精神というものを次の世代の者に植えつけるのは良いことだと思います。ただ、心配なのは、日本人の特徴であった武道、剣道をはじめとする武士道というものが、戦後、占領軍の6・3政策によって、制約されてしまったことです。それでも日本は平均点が高いからまあまあ良いレベル



を保ってきたのですが、ここにさらに新しい日本精神を注ぎ込んだら、ずっと日本の実力は上がるのではないかと思っております。そういう国家的な視点とともに、ロータリーのような市

民生活における哲学というものを、もっと共鳴させるべきだと思うのですね。というのは、最近の若者を見ていると、一見だらしなくしていますが、案外外見と違ってしっかりしているのですよ。この人たちを上手に導いたら、うまくいくのではないかな。そういう人たちが社会人になって、ロータリーにも入ってくれれば…。若い人たちを入れる方法はないものでしょうか。

江崎——大変重要な問題ですね。ロータリーというのは、先ほども申しましたように、毎週1回は必ず例会に出席しなくてはいけませんので、「1時間はいないから頼むぞ」ということを企業に対して言えないとロータリーには参加しにくいという、裁量権の問題が盛んに言われております。優秀だけども、若くて、管理職に対してそれだけの裁量権を持っていないという悩みがかなりあるのですね。そういうことの突破口として、昨年の6月の規程審議会で、ロータリーに若い人を入れるために、ロータリー親善奨学生の学友は企業において裁量権がなくても、ロータリーの親善奨学生であったという履歴だけで、ロータリーに入れてよろしいということに決まりました。そして、神奈川県の湘南では、日本で初めてロータリー財団の奨学生の学友たちだけのクラブができました。会費は年間6万円くらいですかね。それから、例会食もパンとチーズとスープだけというようなことで、非常に若々しいクラブです。それが大阪にもできて、今度愛知の方でも、愛知・岐阜・三重の隣同士の地区で、ロータリー財団の奨学生を中心とした若いクラブをつくろうという動きが始まっております。

豊島——私は、ロータリーそのものが、かなり変質し、原理、原則が軽視される傾向にあると思っています。当然、時代の変化、世代による意識、価値観のギャップは否定できません。それに適応する必要がありましょう。「不易流行」すなわち、過去に価値を認め、後世になっても変えてはならないものと、時に応じて勇気を持って改めて行くべきものがあると思います。しかし、今日のロータリーでは少し取捨選択に狂いが生じているように思います。自分の入会時に週1回の例会への出席、1業種1会員などを指導されたこととの差を感じます。ややもすると、慈善団体、寄付団体、もしくはＮＰＯと混同する傾向すらあり、会員一人ひとりの職業を通じた社会への奉仕活動が原則であることとの差を感じます。エバンストンからの中央集権体制にも疑問を感じます。1年間、ガバナー、ＲＩ会長がすべての根本だと理解しております。確かに会員の減少傾向には危機を感じますが、拡大・増強を急ぐあまり「質」を軽んずればまさに本末転倒と言わざるを得ません。いろいろと生意気を申し上げ、申し訳ありません。世代を超え、地域を越え、日本の良きロータリーのＤＮＡを絶やすことなく、より充実し、楽しくロータリー人生を歩めたらと念願いたします。

江崎——実は、こういうデータがあります。過去5年間で各国の会員の減少率を見た場合に、日本は25%で、2番目に減っていると言われているオーストラリアが6%なんです。世界全体から見れば120何万人から減っていないんですね。日本だけが減っている原因は、社会情勢であるとか経済情勢にあるのではなく、やはりロータリーの内部に問題があるのだと思います。魅力がない。だからこそ研修機能が大切で、ロータリーの本当の意味の面白さがどこにあるのかということを皆で研修したり、現代の情報を集めて、常にアップトゥデートな情報の提供ができるようにしなければならないというように思います。また、奉仕プロジェクトを見直して、皆が納得できる、やりがいのある地域の奉仕、それから、世界に向けての奉仕、これをクラブでもう1度見直さなければいけませんね。

福田——人づくりをやらなければいけないのですね。日本人のあるべき姿を、やはりロータリーはもう1度やり直さないといけない。

斎藤——賛成ですね。先日ＧＳＥでフランス

に行ったときに「高山という町を知ってるか」と聞かれて、「知ってるよ、すぐ近くだよ」と言うと「あそこの家具はすごい。ヨーロッパの文化に負けない」と言うんですね。ですから、アメリカナイズされたいろいろなもので、日本の文化が片っ端から崩されているのです。よその国で評価されて初めて、また入ってくるという悪い癖が生じているのかなという感じがします。内藤パストガバナーがおっしゃる武士道、いろいろな意味での武士道ですね。私はロータリーで何が残るかといったら、人づくりだと思います。

福田――そこが壊れているのですね。だから若い人が入って来ても「なんだ、つまらん」と言ってすぐにやめていってしまう。

江崎――会員の減少にはさまざまな原因がありますが、とにかく、日本的なロータリーの今までの歴史であるとか、そして今後進むべき方向というのは、もっと論じなければならないことであると同時に、やはりロータリーというのは世界的な規模で進んでおりますので、そういう視点から現在の日本を見つめながら進むことも重要なことであります。イギリスはＲＩとは、かなり違うルールでやっておりますね。「ＲＩＢＩ」といいますけども、Rotary International Great Britain & Irelandということで進んでいます。日本も同様に、「ＲＩＪ」、Rotary International Japan というような進み方が必要なのではないかとのご意見が当地区ではよく出ますね。昔から日本だけの特有の歩みがあるのですから、その点を踏まえて修正しながら、日本が日本として持っている特徴を出すべきときが来たのではないかとも考えられます。

本日は大変長時間にわたり、貴重なご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。

斎藤直美ＰＧ、内藤明人ＰＧ、江崎柳節Ｇ、福田清成ＰＧ、豊島徳三ＰＧ（前列左より）
後列 河島嘉男（2007～2008年度地区幹事）　伊藤鶴吉（地区史編纂委員会副委員長）